

現地で活動した国際要員の声 自然災害×臨床工学技士



臨床工学技士 新居 優貴

最新の派遣先:バングラデシュ(ERU^{※1})

プロフィール紹介

大阪府生まれ。名古屋第二赤十字病院勤務。

派遣歴:スマトラ(2005年)、ケニア(2007年)、ジンバブエ(2009年)、ハイチ(2010年)、フィリピン(2012～2013年)、ネパール(2015年)、バングラデシュ(2017年、2018年)

国際要員を目指したきっかけ

名古屋第二赤十字病院で働き始めて1年目、院内に国際医療救援部^{※2}が新設され、当時の上司から「一緒に頑張ってみないか?」と誘われたのをきっかけに、国際医療救援部の一員として要員登録し、活動を始めました。

国際要員として登録されるまでの道のり

国際医療救援部の一員となってみたものの、実際に自分が現地で活動する姿がイメージ出来ずにいました。2003年、イランのバムで大地震が発生し、私を救援部に誘ってくれた上司を始め多くの同僚が救援活動に参加しました。過酷な環境下での医療活動や達成感について話を聞き、私も被災者の少しでも近くで救援活動に貢献したいと強く思うようになりました。

当時はまだ、英語もままならない状態でしたが、電気、給水・衛生、通信の技術が必要なものも分かったので、語学だけでなく、電気や水の資格の取得や、病院の施設管理を行う部署に勉強に行くなどして技術の向上に努めました。

現地での活動のやりがい?



技術要員の主な仕事は居住区や診療所のセットアップ、電気や水などのライフラインの確保で、多くの手を必要とします。フィリピンミンダナオ島の台風被害の救援で診療所を開設したときは、たくさんの地域住民が協力してくれました。私は、建設予定地の整地やレイアウトを担当したのですが、整地に必要な重機を借りることが出来ず、途方に暮れていたある朝、候補地に行くと整地が完了していたのです。住民に尋ねると「夜に重機が空いたのでやっておいたよ。」と何事もなかったかのように言われました。彼らの多くは被災者でもありましたが、雨の日も、辺りが暗くなっても、休日も、笑顔を絶やすことなく、診療所の設営に尽力してくれました。診療所がオープンした時の、みんなの喜びや笑顔は忘れられません。国籍や立場を超えて苦難を共に克服し、ひとつの目的を達成することは、日常では経験することのない、究極のチームワークだと感じます。

今後の目標

日赤が海外に送る医療チームは、診療所型から手術対応が可能となる病院型へと機能拡大します。電気や水の管理を担当する技術要員の役割もより一層重視され、少しでも途絶えれば治療を受けている患者への影響も出かねません。これまでの経験や日常から心がけている問題の早期発見・早期解決を念頭に、今後も活動を支えていきたいです。また、病院型では人工呼吸器など多くの医療機器が導入されるため、臨床工学技士としても貢献したいと思います。



最後に一言

救援活動は、様々な職種の人たちと、多くの支援により成り立っています。このホームページを見て、少しでも多くの人が日赤の救援活動に参加したいと思ったり、活動へ共感したり、支援いただければと思います。今後も、活動を支持してくださる皆様の期待に応えられるように、技術要員として日々精進していきたいです。

- ※1 ERU(Emergency Response Unit: 緊急対応ユニット)は緊急事態・大規模災害発生時に備え、いつでも出動可能な専門家と、すぐに医療や給水衛生活動などが開始できる資機材をセットにしたチームです。
- ※2 名古屋第二赤十字病院は、全国に5施設ある、国際医療救援拠点病院の1つとして、院内に国際医療救援部を設置し、平時より、緊急救援や開発協力事業にかかわる人材の養成、確保、体制作りを担っています。